

【資料紹介】

「山田良政・純三郎兄弟、孫文展示室」紹介

愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員 武井 義和

1. はじめに

2017年9月、愛知大学記念館1階にある展示室のリニューアルが行われた。それまでは玄関に入って左側に東亜同文書院展示室があり、そこに孫文の支援者だった山田良政・純三郎兄弟の展示室も含まれていた。一方、玄関に入って右側には、愛知大学史展示室が二部屋と本間喜一展示室を設置していた。そのため、東亜同文書院と愛知大学の大学史資料をそれぞれ展示していたことから、東亜同文書院から愛知大学への接合について提示できていなかったといえる。

今回のリニューアル展示により、展示室名も大学史展示室「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」とした。1901年に上海に誕生した東亜同文書院から今日の愛知大学に至る百十数年の歴史を、一本の線として紹介展示することができ、そして大学史に関わる史資料以外で特徴的なコレクション資料を、それぞれ「山田良政・純三郎兄弟、孫文展示室」、「荒尾精、近衛家4代、根津

一の書展示室」、さらには「愛知大学設立者名譽学長本間喜一展示室」とした。

(1)大学史展示室「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」

ここでは、尾張藩出身の荒尾精(1859～1896年)が1890年上海に設立した、東亜同文書院の源流に当たる日清貿易研究所の紹介からはじまり、1901年に誕生し1945年まで存在した愛知大学のルーツ校・東亜同文書院(1939年大学に昇格)の歴史を、従来の大型展示パネルや、東亜同文書院で使用された中国語教科書『華語萃編』をはじめ、最終学年生が夏季休暇を利用して中国各地や東南アジアを調査した大旅行の日誌や調査報告書、日本に持ち帰られた東亜同文書院(大学)時代の学籍簿・成績簿などの史資料を、配置を変えて展示している。そして今回、近衛文麿東亜同文書院院長による1931年の卒業式に対する祝辞も新たに展出した。



東亜同文書院大学最後の学長・本間喜一らにより戦後の1946年に愛知大学が創立されてから現在に至るまでの歴史を紹介するコーナーでは、昭和天皇の裁可印がある愛知大学設立認可申請書、創成期の愛知大学生授業ノート、愛知大学の中国研究および中国との交流を示す中国語辞典『中日大辞典』について、原稿カードなどを用いて紹介するほか、愛知大学と地域との関わりを示すものとして1949年の豊橋ユネスコ協力会のポスターなどを展示している。

また、現在愛知大学に置かれている学部や、豊橋・名古屋両キャンパスの変遷などを紹介するパネルも設置している。

#### (2)「愛知大学設立者名誉学長本間喜一展示室」

この展示室は従来のものである。東亜同文書院大学最後の学長で愛知大学創設の中心人物であり、また最高裁判所初代事務総長も務めた本間喜一名誉学長の生涯を紹介する展示室である。本間喜一の家族写真や絵手紙など本間と家族との関係を知ることができる史資料や、戦前に本間喜一が作成した判決文、林則徐の書(本間喜一愛用の掛軸)、1947年に出された最高裁判所事務総長の辞令、昭和天皇・皇后両陛下下園遊会招待状などを展示している。

#### (3)「荒尾精、近衛家4代、根津一の書 展示室」

ここでは、荒尾精が1895年に当時同志社の学生であった牧野虎次(後の第11代同志社総長)に贈った書「石礫」や、東亜同文書院の経営母体である東亜同文会の初代会長に1898年就任した近衛篤磨貴族院議長と、その実子で東亜同文書院院長や第34・38・39代内閣総理大臣を務めた近衛文磨とともに、近衛忠熙(篤磨祖父)や近衛文隆(文磨長男)によってしたためられた近衛家の方々の書、荒尾精の盟友で日清貿易研究所

の運営に携わり、後に東亜同文書院初代・第3代院長を務めた根津一(1860~1927年)の書などを展示している。

#### (4)「山田良政・純三郎兄弟、孫文展示室」

この展示室は既述の通り変更されたが、その分よりコンパクトな展示となった。展示構成は山田兄弟の生涯に沿う形で孫文の指導した辛亥革命、その後の中国革命における兄弟の軌跡を紹介するという、従来のスタイルをとっている。このなかでの見所は、山田純三郎(以下、純三郎と略記)と孫文が写る写真や、孫文と純三郎との間で電報の発信・受信に使用されたと伝えられる暗号表、日本亡命時代の1915年に孫文が純三郎に出した領収書、純三郎に発給された広東護法政府の総統府出入証、後藤新平が孫文にあてた見舞い電報、孫文長男の孫科が山田家にあてた孫文訃報電報、1929年と1931年にそれぞれ南京国民政府や広東国民政府が純三郎に出した顧問招聘状、戦後1946年3月に中国国民党軍の王光漢が純三郎に発給した許可証など、多々ある。

また、孫文史資料コーナーも新たに設け、孫文・宋慶齡夫妻の写真や、孫文がしたため純三郎に贈った書「天下為公」、「至誠如神」などを展示している。

## 2. 山田兄弟、孫文展示室の海外からの認識、日本国内における位置付け

東亜同文書院大学記念センターは2011年秋に、辛亥革命100周年の節目に放映されたNHKBSプレミアム番組「孫文」の取材を受け、展示室や所蔵資料が放映された。また、台湾の国立国父紀念館が2014年に編集発行した『天下為公 全球孫中山紀念機構』では、中国・香港・マカオ・台湾をはじめ、日本・韓国・シンガポール・マレーシア・アメリカにある、孫文にゆかりのある場所や孫文関連の展示施設などが掲載されており、そのなかで日本の施設では、神戸市の孫文

# 愛知大学記念館

## 大学史展示室「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」

- ・年表「東亜同文書院45年、愛知大学70年」
- ・東亜同文書院(大学)『学籍簿』、『成績簿』
- ・荒尾精著『対清意見』、『対清辨妄』
- ・根津一院長の書、ブロンズ像、フロックコート
- ・『華語萃編』など中国語教科書
- ・『大旅行記』、『大陸紀行』など大旅行調査中の日誌
- ・『東亜同文書院調査報告書』
- ・上海丸(長崎～上海航海)模型
- ・愛知大学設立認可申請書と天皇の裁可印
- ・本間喜一(学長)の母への手紙(※愛知大学創設前)
- ・愛知大学創立1周年記念アルバム
- ・愛知大学生の授業ノート(※1950年前後)
- ・『中日大辞典』初版、増訂版、第3版と原稿カード



### 荒尾精、近衛家4代、根津一の書展示室



- ① 荒尾精の書 【日清貿易研究所開設者】
- ② 近衛忠熙の書 ※近衛篤麿の祖父
- ③ 近衛篤麿の書 【第3代貴族院議長、東亜同文会初代会長】  
※近衛文麿の父
- ④⑥ 近衛文麿の書 【第34・38・39代内閣総理大臣、  
東亜同文書院第5代院長、東亜同文会会長】
- ⑤ 近衛文隆の書 ※近衛文麿の長男
- ⑦ 根津一の書 【東亜同文書院初代・第3代院長】

### 愛知大学設立者 名誉学長 本間喜一展示室



- ・名誉学長 本間喜一の家族写真と絵手紙
- ・本間喜一作成の判決文(草稿)
- ・アハン戦争で活躍した林則徐の書(本間喜一愛用の掛軸)
- ・最高裁判所事務総長辞令
- ・最高裁判所事務総長退職時の挨拶状
- ・林毅陸初代愛知大学学長からの書簡
- ・昭和天皇皇后両陛下下園遊会招待状 ほか



### 山田良政・純三郎兄弟、孫文展示室

- ・孫文秘書となった山田純三郎と孫文写真
- ・孫文と宋慶齡夫妻の写真
- ・孫文の書「天下為公」、「至誠如神」
- ・香港へたどりついた孫文と迎える同志写真
- ・孫文の右腕・陳其美の書「仁者寿」
- ・孫文の片腕・黄興の書「履忠蹈信」
- ・孫文の書「山田良政先生墓碑」
- ・山田純三郎への広東国民政府顧問の招聘状 ほか

中国の革命家・孫文に影響を受けた、東亜同文書院の前身校・南京同文書院の教員であった山田良政(兄)と、東亜同文書院の教員であった山田純三郎(弟)の兄弟は、孫文を支えた。三者の史資料コレクションを当展示室にて紹介している。

記念館、熊本県荒尾市の宮崎兄弟資料館、横浜市の横浜中華学院とともに東亜同文書院大学記念センターが挙げられている。

なお、孫文を物心両面で支えた長崎出身の梅屋庄吉に関する資料などを展示する「孫文・梅屋庄吉ミュージアム」(旧香港上海銀行長崎支店記念館)の展示なども挙げるができるが、孫文に関わる日本国内の展示施設は全体的に数少ない。したがって、東亜同文書院大学記念センター、特に山田良政・純三郎兄弟の展示は国内外から注目を集めている。

### 3. 山田家と愛知大学

愛知大学に孫文、そしてその支援者だった山田兄弟の史資料が所蔵されることになった理由は、純三郎の四男で長年資料を管理されていた山田順造氏(1920~1991年)の意思と、彼を取り巻く人間関係にある。

山田順造氏(以下、順造氏と略記)は1938年に東亜同文書院第38期生として入学し、1942年に卒業した。戦後、東京にある東亜交易株式会社や新東亜交易株式会社に勤務し、1965年より三菱商事台北支店、さらに三菱商事高雄駐在員事務所に勤務した。1970年代初めに帰国後は、三菱商事の中国室で勤務したほか、アジア監督付などを務めた(各年の滬友名簿を参照)。1960年に父・純三郎が東京で亡くなると、順造氏は父や伯父に関する膨大な史資料を受け継ぎ保存してきた。しかし、実子がいなかったため、やがて資料をどうするかが問題となってきた。この間、自身の父および伯父に当たる山田良政・純三郎兄弟を顕彰する記念館を、自力で東京およびその近郊に建設する計画も立てていたが、多くの資金が必要となることと、また自身が病気になったこともあり、断念せざるを得なかった。

最終的に、順造氏は亡くなる直前に愛知大学への寄贈を決定したのである。その大きなきっかけは埼玉県東松山市に鎮座して

いた、東亜同文書院(大学)の創設にゆかりのある荒尾精・根津一・近衛篤磨の三先覚を祀った靖亜神社の直会において、順造氏と愛知大学職員であった大野一石氏が隣席となり深い話をされたことによる。靖亜神社は東亜同文書院第18期生の村上徳太郎氏が東亜同文書院同窓会「滬友会」の委託を受けて、1955年に祭祀を始めたもので、ご息・武氏にわたる親子2代、40年の長きにわたり祀られ、多くの同窓生も参拝に訪れた神社である。

これらの経緯は、2007年6月30日の愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催講演会にて村上武氏が次のように語られた。

山田順造さんが集めたいろいろな資料がこの愛知大学へ移って来るについてのきっかけは、1990年の靖亜神社の春の祭典の時に、祭典の後、大野先生と山田順造さんも加わって、根津山州先生や荒尾先生のご位牌の前で直会をして一杯飲んだわけですが、その時に大野先生が、「自分は何で本間先生から頼まれて、わざわざ東京の山田純三郎先生のところへ酒を届けに行ったのか、よく分からない」という話をされた。そうしましたら山田順造さんが「それはこの靖亜神社を本間先生から頼まれたと云うことだったのか、日本へ持ち帰ったのは山田純三郎だから、本間先生はその感謝の意味で酒を届けたのではないか。」と説明しました。……その大野先生を私は小高圭治(東松山市に住んでいて、愛知大学同窓会の埼玉ブロック長をやっておられた)さんと二人で、翌日山田さんの家まで車で送った。山田さんの家は資料で溢れており、足の踏み場もない。2階は2階で、不具になられて頭の発育が止まってしまったと云う民子さんの病室みたいになっている。その足の踏み場もないような所で二人がいろいろ話をされた。山田さ

んが「資料を寄託するには、愛知大学もいいな」と云うことを考え始められたのは、その時がきっかけだったわけです。というのは、その前に山田さんは自分が死んだらどうするかということを考えていて、孫文の資料、それから中国革命に関する山のような資料を全部展示して、そこへ中国人と日本人の学生を一緒に入れ、自分は寮監のような形でそこへ住み込める大きな建物を作りたいんだと言っておられた。……ところが1990（平成2）年に山田さんは「愛知大学でもいいんじゃないか」ということを言い出したわけです。と言うのは、山田さんは三菱商事に勤めておられて蒋介石と非常に縁が深かったものですから、大陸の方を毛嫌いしていたのです。「愛知大学は赤だ」と最初から言っていたのですから。ところがそれが大野先生との話し合いでコロッと変わった。それで山田さんが急逝された時、阿部弘さん（東亜同文書院 39 期）が山田さんのいろんな資料を整理されていて、「何とかしたい、寄託先はどこがいいだろう」と相談があったので、私は「それはもう愛知大学以外にはないだろう。他のどこにそんな資料を、莫大な金をかけて預かり、管理してくれるところがあるだろうか。ただ貰うだけだったらいいけれども、それを整理して研究してやっていくには膨大な金が年々かかるわけですから、そんな事をやってくれるところは他にありません。だから愛知大学で、もし引き受けて下さるのだったらそれが一番いいじゃないか。」という話をしました。阿部さんが大野先生に相談しましたら、大野先生その他愛知大学の方々から非常に有り難いご理解をいただいて、話がスムーズに進んだわけです。

（村上武『『学問のすすめ』『脱亜論』と

荒尾精先生の思想』167～169 頁、『オープン・リサーチ・センター年報』2 号、愛知大学東亜同文書院大学記念センター編、2008 年）

こうした経緯により、順造氏が亡くなられた3ヵ月後の1991年10月、山田家から愛知大学に史資料が寄贈された。そしてそれらの史資料を展示するために、1998年5月9日愛知大学記念館に東亜同文書院大学記念センター常設展示室を開設した。

#### 4. 「山田良政・純三郎兄弟、孫文展示室」の展示史資料

山田良政（以下、良政と略記）、純三郎、孫文に関わる史資料を時系列に沿って展示している。ここでは、それらの史資料の紹介をしたい。

##### (1) 良政関係資料

展示室に入って左手の壁面に、孫文が1918年に著した『建国方略 心理建設』で「外国義士として中国共和のために犠牲となった最初の人物なり」（『総理全集』第一集下冊 529 頁、上海民智書局、1930 年）と記す良政の顔写真パネル【1】を展示している。

津軽藩士山田浩蔵・きせ夫妻の長男として弘前に誕生した良政（1868～1900 年）は、東奥義塾（叔父の菊池九郎が 1872 年に創設）を卒業後、青森師範学校に入学するが、「賄い征伐」の首謀者の身代わりとなり退学する。その彼が清国へ目を向けるきっかけを作った人物が陸羯南である。陸家は山田家の道を隔てた向かい側にあり、往来があったため、良政は当時東京にいた陸羯南を頼って上京し相談した。陸は清国へ目を向けること、また技術を身に付けて清国へ渡ることを勧めた。その結果、良政は 1889 年水産伝習所（現在の東京海洋大学）第 1 期生として入学、翌年卒業すると北海道昆布会社に入社し、上海支店に赴任した。こうして良政と清国との関わりができたのである。



### 良政の顔写真【1】

良政は享年 33 歳の若さで戦死したため、彼に関する資料は少ない。そうしたなかで、日清戦争勃発直後の 1894 年 8 月上旬に良政が浩蔵にあてた手紙には「陸戦ノ節ニハ如何ニ虚弱ナル私共ニテモ何ニカノ用ニ立チ申ス…」とあり、戦場に行ってお役に立ちたいとの意志が記されている。彼の内面を知ることができる数少ない史資料である。

日清戦争勃発後、会社を辞職して陸軍通訳官として出征、旧満洲に赴く。戦争終結後は日本が新たに領土として獲得した台湾に赴任する。この台湾で出会った海軍軍人の瀧川具和との縁で、1897 年に瀧川が台湾総督府副官から在清国日本公使館の駐在武官として天津へ転勤すると、良政は翌 1898 年 1 月に瀧川を追って華北へ移動し、そして同年 9 月北京で戊戌政変に際会する。戊戌政変とは、同年 6 月に光緒帝らが推進した近代的改革である戊戌変法を西太后ら保守派が弾圧した出来事である。この時に良政は瀧川や北京で出会った平山周らとともに

改革派の王照を救出、北京から天津へ向かい、日本の軍艦「大島」に収容する。また、日本公使館の保護下にあった梁啓超も日本へ亡命させる。こうして戊戌政変に改革派救出という形で関わったわけであるが、革命家孫文の支援者へと変わっていくこととなる。

1899 年、平山周の紹介により、東京の神田三崎町の仮寓で良政は清朝打倒を目指す孫文と面会する。孫文は 1895 年に広州蜂起が失敗した後日本に亡命し、犬養毅や平山周の支援を受けて東京で亡命生活を送っていた。良政と孫文の会談内容は不明だが、これを機に孫文の支援者になったと伝えられる。

一方、良政は 1899 年 5 月から 6 月の間に東亜同文会に入会、同会会員の井手三郎の勧めで南京同文書院開設のための渡清を勧められ、翌 1900 年 1 月、書院の教授兼舎監として赴任し、開校準備に関わっていく。南京同文書院は、近衛篤磨貴族院議長が会長を務める東亜同文会が、日清間の貿易実務を担う人材の育成を通じて日清友好の実現を目指し、開設した学校である。1899 年海外視察に赴いていた近衛が帰路清国へ立ち寄り、南京で劉坤一両江総督と面会して学校開設の理解と協力を得ることに成功した結果、開設に至ったものである。

南京同文書院は 1900 年 5 月に開校し、良政は「支那時文」「支那語」を担当、その後清国人学生を収容する分院が開設されると、そこでは英語を担当した。だが、8 月には折から華北で発生していた義和団事件の影響による南京の不安定化により、また学生たちが革命へ参加しようとする動きが生じたこともあり、学校は開校からわずか 3 ヶ月足らずで上海へ移転することとなる。その頃、孫文は挙兵計画を進めており、上海で彼から計画を聞いた良政は書院を辞職し、蜂起に関与していく。

辞職後、良政は台湾に行き、児玉源太郎総

督と後藤新平民政長官を孫文に紹介する。児玉は孫文に武器支援や日本軍人の参加を約束し、10月惠州蜂起ののろしが挙げた。しかしその直後、日本国内では山縣有朋内閣から伊藤博文内閣に交代し、これが惠州蜂起の中止をもたらすこととなる。伊藤内閣は不干渉方針を取り、児玉に武器支援や軍人参加を認めず、それにより児玉の約束は反故となったからである。

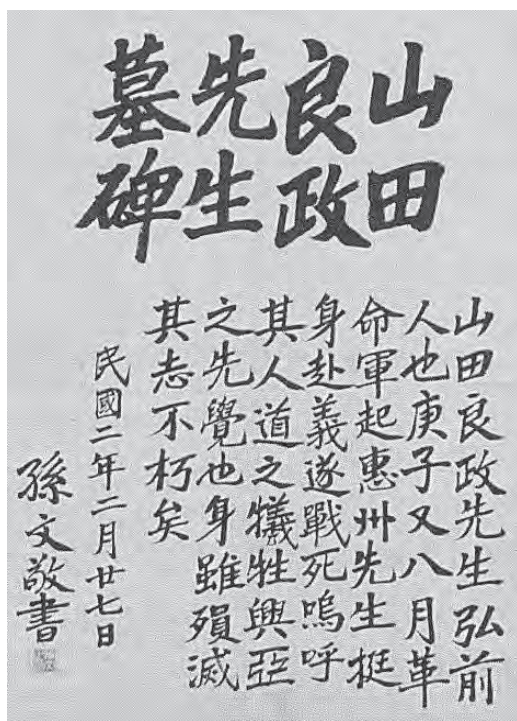
孫文は蜂起の中止と臨機応変に対処するよう蜂起軍勢に伝達することにしたが、その任務には良政と同志数名が当たった。彼らは孫文の命を伝達したが、その帰途清軍と遭遇、交戦の後捕えられ処刑された。岡井礼子『孫文を助けた山田兄弟を巡る旅』によれば、良政たちは犠牲になった後ライチの樹の根元に埋められたと地元で言われており、またその樹は現存しているとのことである（同書24～25頁、彩流社、2016年）。

惠州蜂起は以上のような結末を迎えたが、孫文は継続して清朝打倒を目指して革命活動を行っていく。1905年に東京で中国同盟会を結成し、その後も繰り返し蜂起を試みるが、いずれも失敗した。だが、1911年10月の武昌蜂起により辛亥革命が勃発することとなる。革命勃発時アメリカにいた孫文は、アメリカからヨーロッパを経て、同年1年12月香港に到着した。この時、純三郎らが上海から香港まで出迎えに赴いている。

1912年1月1日、孫文は南京でアジア最初の共和制国家である中華民国を樹立し、臨時大総統に就任した。しかし、依然として北方には清朝が存在しており、また中華民国は財源を欠いていたため、軍事的に打倒することが困難だった。そのため、清朝側の袁世凱に宣統帝（後に満洲国皇帝）を退位させることと引き換えに、臨時大総統の地位を譲るという流れとなった。1912年2月12日宣統帝は退位を宣言し、ここに清朝は滅亡したのである。それは秦の始皇帝以来約二千年続いた皇帝による専制政治の終焉を

意味した。

一方、4月1日に臨時大総統を正式に辞職した孫文は、鉄道網の敷設などの経済建設に向かっていく。1913年2月から3月にかけて、「全国鐵路督弁」という身分で日本を公式訪問した。その大きな目的は鉄道建設に対する協力者を募ることであった。と同時に、孫文はこの来日時に、東京谷中の全生庵に良政碑を建碑している。1913年2月27日のことである。なお、碑に刻まれた本文が「山田良政先生墓碑」と題した書【2】としても残っている。



孫文書「山田良政先生墓碑」【2】

ところで、1913年時点では良政の最期は分からず、生死不明の状態であった。だが、1918年に純三郎が孫文の部下で、惠州蜂起当時は清軍の将校であった洪兆麟から良政を処刑したとの告白を受けたことにより、彼の死がようやく判明したのである。その後、純三郎によって良政が処刑された場所の土が持ち帰られ、故郷の弘前で葬儀が行われた。この時、孫文代理として廖仲愷が派

遣された。また、孫文撰の良政碑が 1919 年 10 月 15 日に弘前の貞昌寺に建立され、孫文に派遣された陳中孚が建碑式で孫文や唐紹儀の祭文を朗読している。貞昌寺に建碑された良政碑の写真、そして陳中孚が碑前で祭文を朗読する様子の写真【3】も展示している。



陳中孚が碑前で祭文を朗読する様子の写真【3】

さて、こうしてみると、実は良政と孫文が関わった年月はきわめて短いことが分かる。既述のように両者は 1899 年に出会い、翌年には良政は惠州蜂起で戦死しているからである。しかし、展示資料を通じて、孫文の良政に対する追悼の念は後々まで深く続いたことが浮かび上がってくる。

## (2) 純三郎関係資料

純三郎 (1876~1960 年) は、兄良政の遺志を受け継いで孫文の支援者となった人物である。1911 年 12 月に香港の船上で純三郎と孫文の二人だけで撮影された写真【4】を、象徴的な史資料として最初に展示している。

純三郎は弘前の朝陽小学校や東奥義塾を卒業し、一時室蘭炭礦汽船会社で荷役夫などをする。その後 1899 年、良政の勧めで東亜同文会の清国留学試験を受験して合格し渡清、上海で中国語を勉強していたが、翌年 5 月南京同文書院が開学するとそこへ入学



純三郎と孫文の二人だけで撮影された写真【4】

する。純三郎が孫文と正式に会ったのは在学中のことで、上海で良政の紹介によるものだった。「正式に会った」というのは、実は前年の 1899 年、良政が孫文と会見した時に、純三郎は隣の部屋から障子に穴を開けて孫文を盗み見したからである。その時の孫文の姿について「非常なおでこで、しかも後頭部がまた突き出ている、口元がきりりと締まっている。たしかに偉そうなつら構えだ。」(山田純三郎「シナ革命と孫文の中日聯盟」『第一人者の言葉』1961 年) と回想している。やがて、南京同文書院が 1901 年に上海で東亜同文書院として再出発すると、事務員兼助教授として勤務し、日露戦争従軍を経て 1907 年南満洲鉄道株式会社 (満鉄) に入社した。その後、満鉄が採掘していた撫順炭の販路拡大のために上海に赴任し、三井物産上海支店内にデスクを置いて勤務したが、佐藤慎一郎氏 (純三郎の甥、戦後拓殖大学教授) によれば、この頃革命に情熱を傾けるようになったという。その経緯について、佐藤



氏は次のように語っている。

…上海に赴任し、三井支店に席をおいた。石炭の販売は卸も小売も、三井に委託したからであります。実際、立ち合ってみると驚いた。撫順炭が上海に着く。三井では、船から石炭を下ろす時に、秤に足をはさんで目方を減らして受け取る。そして満鉄本社には「品質は良かったが、欠斤が多いので注意して欲しい」と打電し、不足分として二度取りをしている。ところがまた、売る時には、秤に足をかけて重量を増やしている。三井では、仕入れと販売の両股かけて二重にも三重にもかけて儲けるのです。ところが、三井としては、船長・機関長らに賄賂をやらぬと、船では石炭を買ってくれない。また工場でも、上は社長から下は門番・火夫に至るまで賄賂をやらぬと、良い石炭を納入しても、「今度の石炭はボタばかり多くて燃ない」と騒ぐ。叔父は商売なるものの実態を知り、…このような商売は男子のやるべきことではない、少なくとも俺はやらない、と決意し、生涯の情熱を中国革命に捧げることが出来たと言っています。（佐藤慎一郎『近代中国革命史に見る酷烈さとさわやかさの中国学』157～159頁、大湊書房、1985年）

辛亥革命勃発直後の11月に孫文の有力な協力者である陳其美が、上海にある江南機器局の襲撃を計画した。この時、純三郎は陳の依頼で吉明上海総領事に面会、ピストル3丁を借受け陳に渡している。翌12月には、辛亥革命の報を聞いて欧米から帰国した孫文を、宮崎滔天らとともに香港で出迎えた。すでに紹介したが、この時に船上で**純三郎と孫文の二人だけで撮影された写真**、そして同じ船上で撮影された、**孫文を出迎**

**えた日中の同志たちと孫文の集合写真【5】**も今に残っている。純三郎が革命の表舞台に登場するのはこの時期であり、これ以降孫文の支援者となっていく。



#### 孫文を出迎えた日中の同志たちと孫文の集合写真【5】

香港から上海へ向かう船中で、孫文は三井物産への借金を純三郎に依頼し、それを受けた純三郎は藤瀬政次郎上海支店長と孫文を会わせるなど、仲介役を務めた。三井物産本社も絡んだこの借金は結局実現しなかったが、純三郎は重要な役目を担っていたことになる。

孫文が1913年2月から3月にかけて日本を公式訪問した折には、随行員の一人として同行した。愛知大学東亜同文書院大学記念センターが所蔵する史資料には、この時の写真も何点か含まれているが、東京・横須賀・奈良・大阪など各地を訪れた際に撮影された写真には、まるで孫文に寄り添うような純三郎の姿が確認できる。

ところで、孫文が日本を公式訪問中の1913年3月、国民党の実質的党首であった宋教仁が暗殺された。国民党は前年に結成され、孫文が理事長に選出されたが、党結成の中心的役割を果たしたのは宋だった。国民党は国会議員選挙で躍進し、宋は時期の内閣総理と目されていた。そのため、独裁化

を強める臨時大総統の袁世凱に政敵とみなされ暗殺されたのである。この事件で孫文と袁世凱の対立が決定的となり、同年7月、袁世凱打倒を目指す「第二革命」が勃発した。しかし短期間で鎮圧され、8月に孫文は日本への亡命を余儀なくされた。以降、1916年4月に帰国するまで日本に滞在することとなった。

純三郎は孫文の日本亡命中も、彼の下で活動した。旧満洲のある軍閥から同地に一大勢力を誇っていた奉天軍閥の張作霖を打倒したいとの連絡があったため、1914年1月孫文の命を受けて陳其美・戴季陶とともに旧満洲へ渡り、大連の満鉄病院を拠点として軍閥との連絡などに当たった。しかし、張作霖の圧迫などで活動を行うことができなくなり、帰国を余儀なくされている。純三郎は翌年にも孫文によって蒋介石・丁仁傑とともに再び現地へ派遣され、ハルビンやチチハルまで行き活動した。だが、これも成果を挙げるができなかった。

一方、中国では1915年12月に、袁世凱が帝制を施行して皇帝に即位しようとする動きが本格化した。これはまさに辛亥革命で実現した共和制からの逆行であった。そのため、これに反対する「第三革命」が12月に勃発した。第三革命の盛り上がりと列強の帝制延期勧告などで、袁世凱は1916年3月に帝制取り消しを宣言、6月死去したが、この革命の期間中、山田家を悲劇が襲った。同年5月18日、上海フランス租界の純三郎宅を訪れた革命家の陳其美が、袁世凱側の刺客に暗殺されたのである。しかもこの時、そばにいた女中が銃声に驚き、まだ幼い純三郎の長女・民子を地面に落としてしまったのである。これにより、民子は脳に重い障害を抱えることとなってしまった。展示室には、生前の陳其美写真【6】とともに暗殺された直後の陳其美写真【7】があり、生々しい悲劇の様子を今に伝えている。

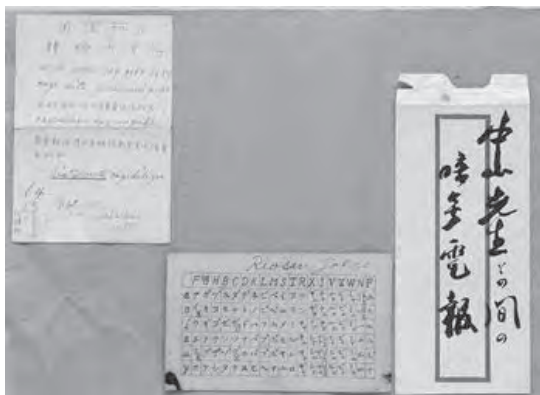


生前の陳其美写真【6】



暗殺された直後の陳其美写真【7】

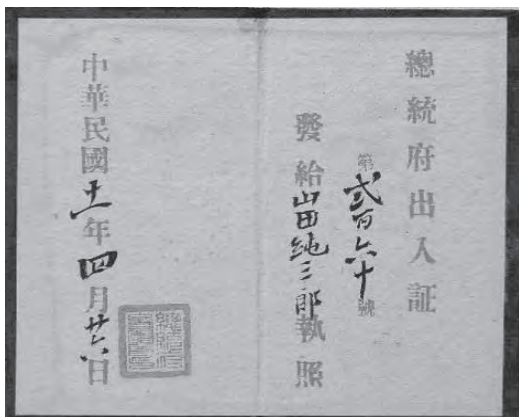
しかし、こうした悲劇に見舞われながらも、純三郎による孫文への支援は続いた。1910年代後半から1920年代半ばにかけて、孫文ら革命派が広東省で目指した資源開発を目指す動きにも関与している。また、具体的な使用年是不明だが、孫文と純三郎との間で電報の発信・受信の際に使用されたと伝えられる暗号表【8】も残っており、それ



暗号表【8】

も孫文と純三郎の結び付きを示す貴重な史資料である。

孫文は日本から帰国後の 1917 年に第一次広東軍政府を広東省に樹立したが、各勢力の対立のなかで翌年には政府を辞職し、上海へ去らざるを得ない状況となった。その後、1920 年 12 月に第二次広東軍政府を樹立した。1921 年 4 月には国会非常会議により非常大統領に選出され、翌 5 月軍政府の取り消しを宣言するとともに、非常大統領に就任した。1922 年 4 月 26 日の日付けがある広東護法政府の総統府出入証【9】は、



広東護法政府の総統府出入証【9】

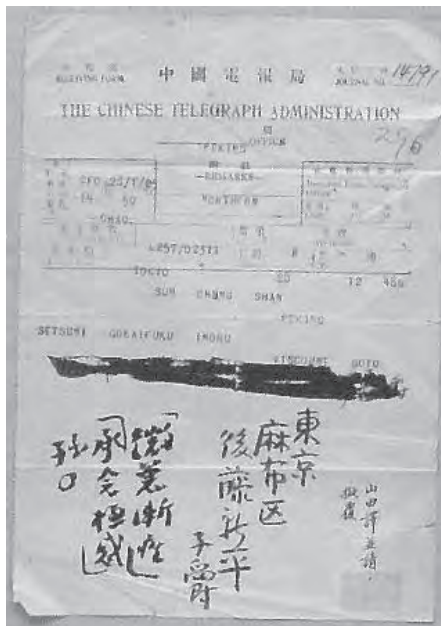
第二次広東軍政府の後に成立した広東護法政府が純三郎に発給したものである。

だが、1922 年 6 月孫文に協力していた当地の軍閥・陳炯明（ちんけいめい）がクーデターを起こしたため、広東護法政府は崩壊

し孫文は上海に避難を余儀なくされた。この時、純三郎は藤田栄介広東総領事と連絡を取って孫文が逃げる手助けをし、また革命家で純三郎の同志でもあった廖仲愷夫人の何香凝を救出しようと尽力している。

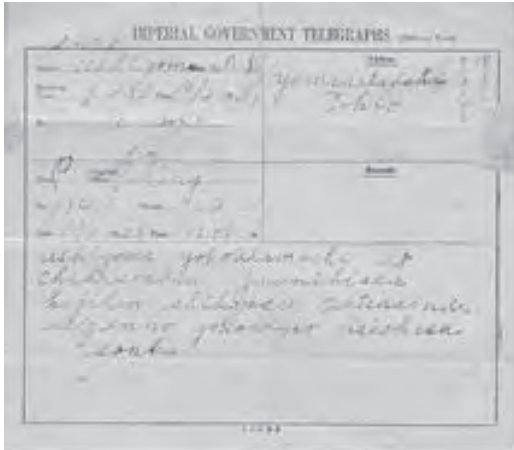
1923 年孫文は広東省に戻り、3 月に第三次広東軍政府を樹立した。翌 1924 年 11 月には北京政府の張作霖らとの会見に臨むため、広東から神戸経由で北京に向かう。孫文は日本にいた純三郎に神戸に来るよう召電し、神戸へ駆け付けた純三郎は孫文に同行して中国へ渡った。天津到着後、純三郎は孫文と張作霖が会見する前に、張の軍事顧問である町野武馬に会い、張が孫文を拉致しないよう身の安全の保障を求めるなど、孫文に十分配慮した行動をしている。

しかし、孫文は 1925 年 3 月 12 日に北京で肝臓がんにより亡くなった。臨終に際して純三郎は孫文夫人の宋慶齡に病室へ招き入れられ、日本人としてただ一人死に水を取った。亡くなる前に後藤新平が孫文にあてた見舞い電報【10】、そして孫文長男の孫科が山田忠にあてた孫文計報電報【11】は、



後藤新平が孫文にあてた見舞い電報【10】

孫文死去前後の様子を伝える貴重な史資料である。孫文訃報電報にはローマ字で「牛込横寺町 28 父孫文 12 日朝 9 時半死去す 謹んで生前のご厚誼を拝謝す 孫科」と書かれている。山田忠は純三郎の長男である。



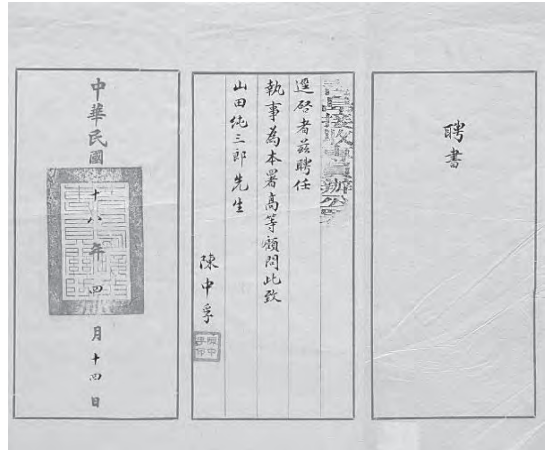
孫科が山田忠にあてた孫文訃報電報【11】

孫文は逝去後、北京の碧雲寺に埋葬されたが、1929年南京に孫文の墓である「中山陵」が造られると、彼の棺が北京から南京に移された。そして同年6月1日、中山陵において移霊祭が執り行われた。純三郎も移霊祭に参列している。

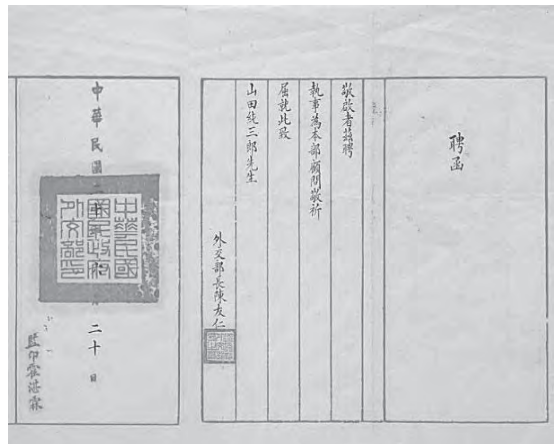
さて、純三郎は孫文死去直後の1925年9月に成立した広東国民政府でも顧問に就任するが、廖仲愷暗殺や政権左派と右派の対立などもあり、1926年広東を離れ上海に移る。この頃、中国では1926年より、各地に存在した軍閥を倒し中国統一を目指す「北伐」が蒋介石を指導者として開始された。国民革命軍は広東省より北上、その途中1927年に蒋介石は南京国民政府を樹立、翌年には北伐が完了し、中国統一が一応達成された。

こうした新たな中国情勢のなかで、陳中孚によって1929年に南京国民政府青島接收委員の顧問招聘状【12】が出され、純三郎は顧問就任を要請されている。しかし、蒋介石が独裁化の傾向を強めると、それに反

対して孫科らは1931年に反蔣政権「広東国民政府」を結成し、純三郎に広東国民政府の顧問招聘状【13】を發して顧問就任を要請した。純三郎はそれに応じて、1931年6月同政府に参加している。



南京国民政府青島接收委員の顧問招聘状【12】

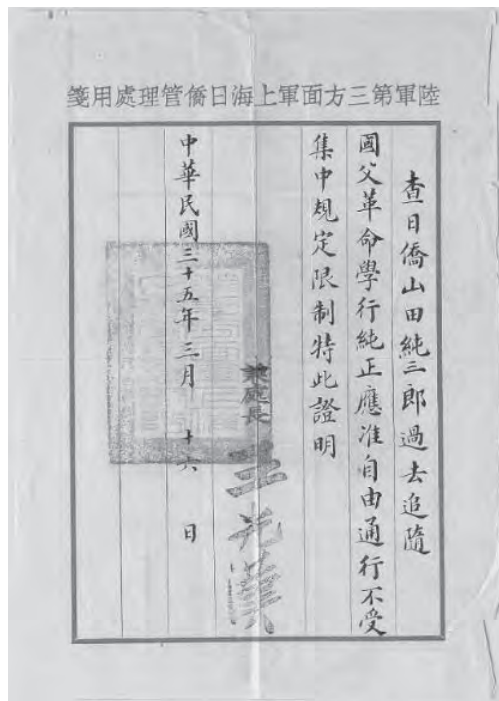


広東国民政府の顧問招聘状【13】

ところで、広東から上海へ移動後の純三郎の活動をみると、中国語新聞『江南晚報』、『江南正報』を刊行したほか、1936年には日本語雑誌『上海』を發行する上海雑誌社の社長に就任、また、同年には「上海日語専修学校」校長を務めるなど、メディアや日本語教育の分野での活動に軸足を置いていった様子が浮かび上がる。

1945年8月、日本は敗戦を迎える。しか

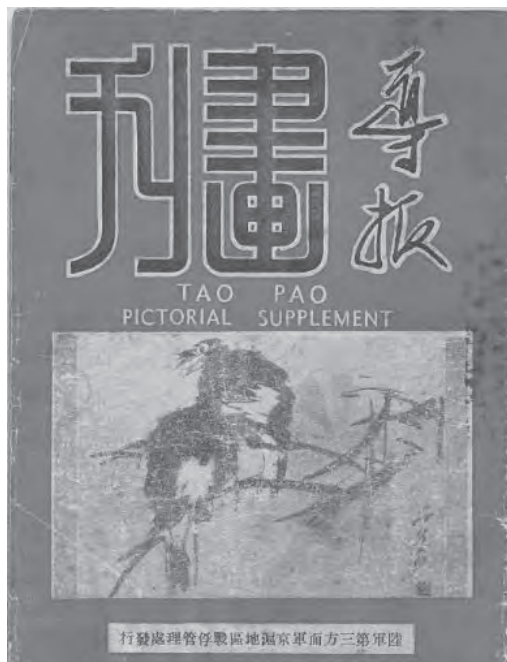
し、中国国民政府が戦時中移転していた重慶から進駐してきた国民政府軍は、純三郎をかつて孫文に協力したという理由により敗戦国民扱いせず、従来生活を保障した。1946年3月に日僑管理処長（「日僑」は日本人居留民の意味）王光漢が純三郎に発給した証明書【14】がそれを示している。ま



王光漢が純三郎に発給した証明書【14】

た、同じく1946年に国民政府軍が発行した雑誌『導報画刊』【15】には、純三郎を紹介する記事が掲載されており、そのサブタイトルには「中国革命之友」と付けられている。これらの史資料は、戦争直後であっても純三郎が孫文の支援者であったということで、中国側から高く評価されていたことを示すものである。

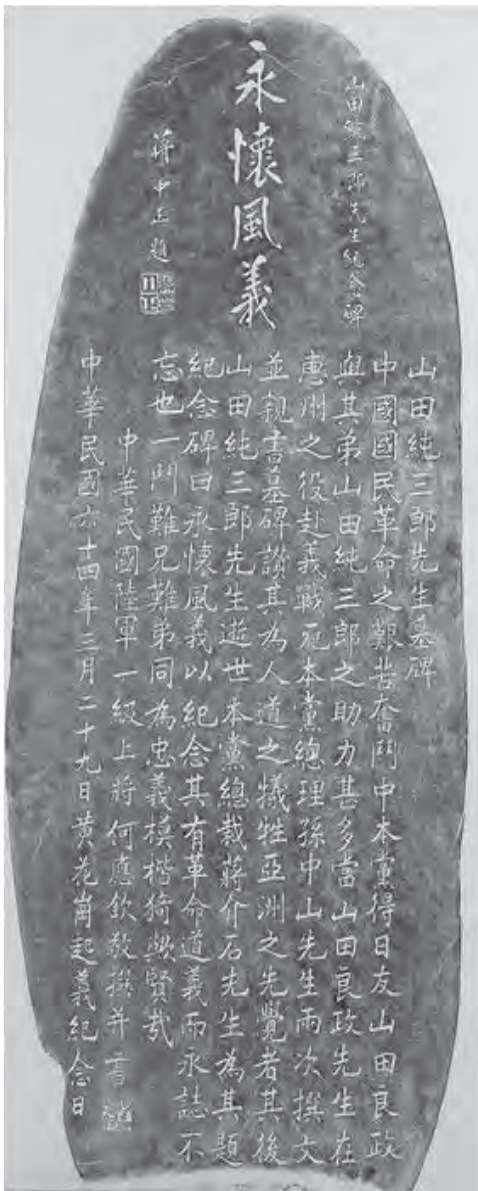
純三郎は1948年に日本へ引き揚げてきた。その後、1954年には蒋介石の第2回総統就任式に招待され台湾を訪問、蒋介石はじめかつての革命家たちと旧交を温めたほか、1955年には自らが主宰者となって東京の湯島聖堂で「孫文先生逝世三十周年記念



雑誌『導報画刊』【15】

祭」を開催した。そして1960年2月に東京で亡くなった。

だが、死後もなおかつての革命との縁は途切れることはなく、1976年には青森県日華親善協会などが中心となり、貞昌寺に純三郎記念碑が建てられた。蒋介石から贈られた「永懷風義」という銘が篆刻されたこの碑は現在、貞昌寺境内で良政碑と並んで建っている。なお、純三郎記念碑拓本【16】と記念碑の写真は展示室でみることができる。



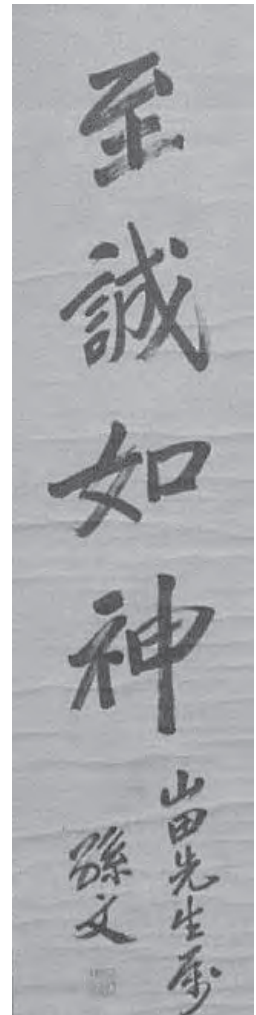
純三郎記念碑拓本【16】

(3)孫文關係資料

ここでは、孫文が辛亥革命以前の時期に世界各地に足跡を残したことを示した世界地図パネルや、1913年に日本を公式訪問した時の経路図を示すパネルを並べて展示し、孫文が活動したスケールの大きさを紹介している。とともに、彼に直接関わる史資料を一カ所に集め、見やすくしている。

まず、「天下為公」、「至誠如神」【17】と

したためられた、純三郎に贈られた書が目  
を引く。「天下為公」は「政治は公のために



孫文書「天下為公」、「至誠如神」【17】

ある」、「至誠如神」は「真心の極致は神のよ  
うに、全ての物事に通ずる」という意味である。また、「山田先生恵存 民国三年十一月  
写真 孫文贈」と記された孫文写真【18】  
は1914年に撮影されたものである。袁世凱  
打倒を目指した第二革命(1913年)が失敗  
し、日本で亡命生活を余儀なくされている  
時期である。

孫文はこの亡命生活中の1915年に、アメ  
リカ留学後の1913年来日して孫文の英語  
秘書を務めていた宋慶齡と東京で結婚した。  
結婚に関しては梅屋庄吉(映画会社日活の



孫文写真【18】

創業者) 夫人・トクが仲人役を務め、結婚披露宴は梅屋庄吉邸で行われた。なお、宋慶齡は姉・宋靄齡(孔祥熙国民政府財政部長夫人)、妹・宋美齡(蒋介石夫人)とともに「宋家三姉妹」として知られている。

孫文が中国へ帰国した後の1920年に撮影された孫文・宋慶齡夫妻写真【19】、およ



孫文・宋慶齡夫妻写真【19】

び宋慶齡写真【20】は、台紙の上下にサインが入っているところが注目すべきポイントである。特に、台紙の上部には両方の写真に共通して「To Mr. and Mrs. Yamada」と英語で書かれたサインが入っている。



宋慶齡写真【20】

ここで紹介したいずれの史資料も、孫文と純三郎、また孫文・宋慶齡と山田家との深い関係を知ることができるものである。

## 5. おわりに

愛知大学記念館のリニューアルに伴い、本学の所蔵物を公開すること、さらにその史資料の解説を充実させるために、展示物のキャプションを再考した。

しかしながら、キャプションでは文章量に制限があり、詳細な記載ができないことから、今回の『同文書院記念報』に改めて詳細な説明を書かせて頂いた。山田兄弟の生涯および兄弟と孫文との関係を多くの方に知って頂ければ幸いであり、愛知大学記念館に来館されることを切に願う。

<主な参考文献（本文で掲載以外）>

- ・『東亜同文書院大学史』（滬友会編、1982年）
- ・結束博治『醇なる日本人』（プレジデント社、1992年）
- ・池田誠・安井三吉・副島昭一・西村成雄『図説中国近現代史』第3版（法律文化社、2009年）
- ・小坂文乃『革命をプロデュースした日本人』（講談社、2009年）
- ・保阪正康『孫文の辛亥革命を助けた日本人』（筑摩書房、2009年）
- ・武井義和『孫文を支えた日本人 山田良政・純三郎兄弟〔増補改訂版〕』（あるむ、2014年）
- ・同「孫文支援者・山田純三郎の革命派への関与とその実態について」（馬場毅編『近代日中関係史の中のアジア主義』あるむ、2017年）
- ・深町英夫『孫文』（岩波書店、2016年）